

# 資料渉猟余話

その65

飯田下伊那関連の戦後の出版物を見ていると、その発行所に冬至書房、発行者は中島善弥という名前をよく見かける。すなわち、岸田國士『序文』(1946)、矢高行路『山寺先生 今往来風異聞』(1958)、日夏耿之介『詩集 呪文』(1965)、岡村二一『詩集 幻想君臨 復刻版』(1972)、久保田正文『冬のランプ』(1972)ほか、個人の俳句集も多い。

おそらく、中島善弥という冬至書房の代表者が飯田下伊那に關係

の久保田正文の生家の2階が最初の冬至書房の事務所だったとある。久保田の回想を参考に、冬至書房や中島善弥の動向をみても、以下のような経緯が推測できた。

昭和21年秋に鈴加町の久保田の生家の2

## 冬至書房と中島善弥

嶋 不 濁

中島自身が、岸田國士などの評論を書いたことと事実(『南信月刊』1号)で、のちに探し考へ、冬至書房や中島善弥の動向をみても、以下のような経緯が推測できた。

階を事務所にして「冬至書房」を創業。社名は国文学者の久保田正文と演劇の岸田國士である

と現在の会社案内(HP)にあるが、久保田という友人が起業しようとした出版社の名前を譲り受けたとある。として近代詩上、幾多

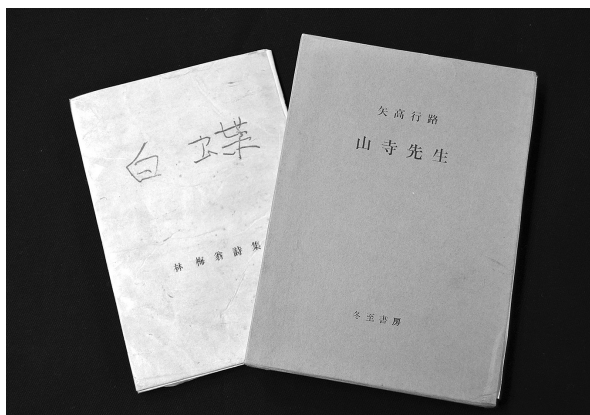
既述の鈴加町の事務所は、昭和22年4月の飯田の大火で焼けて、羽根垣外にうつり事業を続けたが、昭和29(1954)年には東京に進出したようだ。文学関係の脈を生かして、室生犀星をはじめ

その後どうなったのか、現在も続いている冬至書房では「中島氏は創業者ではあるけれども早々に体調を崩して、実際に冬至書房を運営していたのはかなり短い期間だったらしい」という…

『冬のボプラ』(昭和47年)に中島善弥が刊行しているの、その頃までは元気だったので、出版界の事情で、マスメディアを対象とした塩沢の調査の網に漏れたものと思われる。



中央、和服姿が善弥



冬至書房刊の本(MSC蔵)